

バンジャマン・コンスタン 『日記』 (13) : (3)  
『略日記』 (続き)

高藤, 冬武  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5403>

---

出版情報 : 言語文化論究. 14, pp.221-252, 2001-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン :  
権利関係 :

## 翻訳：バンジャマン・コンスタン『日記』(XIII)

### Ⅲ 『略日記』(続き)

高 藤 冬 武

1806年4月

- 一日 苦痛の途切れることなし。自然の生理の忌々しきかな！スタール夫人，ジュネーヴを發つ。病身，小説本読み漁る。
- 二日 病癒えず。小説本読み漁る。来信，父。
- 三日 病なお続く。コベ復。フルコーに手紙認め「三分の一整理公債」とともにプロスペールに託す。プロスペール發つ。シュレーゲル喜ぶ。
- 四日 来信，ゲクハウゼン嬢。書類整理。時間を無駄にす。1 [肉の快] の手っ取り早い手段，たとえば清書係は。
- 五日 發信，フーバー夫人，テレーズに託す。来信，ドワドン。書類整理。時間の無駄。「教育」の章朗読。痛論，胸部に障りたり。
- 六日 4，進捗なきに等し。2. 2. 1 3.
- 七日 發信，父，マラダン。4，進捗なきに等し。イダ [3月25日参照] <sup>バントマイム</sup> と無言劇。えならず愛嬌ある女なり。
- 八日 發信，ナッソー夫人。夜間，咳嗽頻り，胸部痛。来信，オッシェ。シェニエ書簡集。見事な活写，見事な文，だが，詩賦は <sup>なまはんじゃく</sup> 生半尺にして洒落は旧古陳套の体を呈す。
- 九日 (水曜日) ネットル氏二回忌。光陰矢のごとし。来信，ドワドン。4，沈滞。
- 十日 フェルネ行。ヴォルテールの嘗ての老女中，その昔の記憶を後生大事とす。ヴォルテール毒殺説信じて疑わず。この種の話，世間一般の好むところなり。
- 十一日 發信，ドゥモラン氏 [ローザンヌの銀行家，調停判事]。4，少しく。

十二日 来信, テレーズ・フォルステール, ナッソー夫人, コベからジュネーヴへ移る。  
午餐, オディエ夫人宅。

十三日 4, 少しく。午餐, リエ夫人宅。

十四日 発信, ルスラン。来信, 父。シャリエール夫人の『フィンチ家』[『ウォルター・フィンチ卿とその息子』死後出版]。才の切れ, 奥行の広さ, 情け, そして悪趣味。来信, ナッソー夫人, ドウモラン氏。4, 少しく。底しれぬ寂寥感。『フィンチ家』に触れて我が思出ことごとく今に蘇りたり。死の観念, 我が身邊に漂いて消ゆることなし。午餐, 知事宅。

十五日 発信, ナッソー夫人。小昼餐時, 忌わしき釈明。悪夜。4, 復調。午餐, シャトーヴィユ夫人 [不詳] 宅。退屈なる晚餐, アルガン宅。

十六日 4, 可。「戦争」の章, 脱稿。午餐の死ぬほど退屈なる, ジェルマニー夫人宅。戦争の章一部朗読。傑作なり。総頁数469。

十七日 4, 纒なるも良。人のものしたる文章, 何篇か読む。美文として世に名高きものその中にあり。3. 3. 3.

十八日 発信, 父。来信, ナッソー夫人。オシェ, フールコー, プロスペールに手紙を認めウジェーヌに託す。目下の状況からして狂気の沙汰なれば8 [結婚計画] 決定的に断念す。3. 3. 3. 16. 16. 16.

十九日 ミネット発信 [スタール夫人, 追放令でバリ40里以内に入れずオセール止まり]。終生, 3. 16. だが, 1なければ生きて行けぬ身なれば16は1の処理法解決あつてのこと。山と積まれたる書類を整理す。1.

二十日 4, 期待せしよりも捗らぬが先行きよし。発信, ルコント, 生存証明書同封。

二十一日 発信, ミネット。4, 可。数箇所訪問。とにかくその意図明確にして本人も認めるところなり。反応の如何を待つべし [スタール夫人の仏入国の意図を関係諸方に説明]。

二十二日 発信, ナッソー夫人。来信, フールコー。ミネットに小吉報, ジラルダン [ルソーの弟子, ナポレオンにつき護民院, 立法院に入る] よりあり。知事訪問。4, だが, この章鑄直しあるべし。

二十三日 発信, ミネット。4, はか行かず, だが論述方針まとまる。閑居不善, せつかくの孤独悪用せり。

二十四日 来信，ミネット。4，纒。コペへ発つ。

二十五日 発信，ミネット，フルコー。ナッソー夫人 [来信]。4，悪くなし。孤独に居馴染み始む。「古代共和制」の章明日脱稿の予定。3. 3. 3.

二十六日 (土曜日) 来信，ミネット，父。4，良。

二十七日 奇夢。身震。アラール。4，纒。ここにある書類すべて整理終了。

二十八日 発信，ミネット，父。ローザンヌへ発つ。ロールにてノアイユ公 [仏の軍人，物理学者。亡命貴族としてスイスに逼塞，そこでゴロフキン伯爵夫人を識り再婚。1739-1824]。老翁老嫗鴛鴦の契ちぎりというべきか。ローザンヌ着。ナッソー夫人，病。差出人署名 C. D. H. [シャルロット・ドゥ・アルダンベール] とある手紙，余宛に届けられコペに転送されたり。デュテルトル夫人のことなるや。新事態。余の優柔不断大なるべし。

二十九日 来信，フーバー夫人。例の手紙デュテルトル夫人なり。再転送未だ戻らず。署名，C. D. H. に間違なし。離婚ということか。千思百考，思案のしどころなり。1 3 - 1 2. 引越に終日無駄にす。デュテルトル夫人の書戻らず。同書戻り来たるが「委細後便にて」との趣旨かきつけの書付の類なり。その後便を待つとするが，としても，つらつら顧みるに 3. 3. だが状況の変化あらばこの限りにあらず。夜，ボタン嬢宅。晚餐，ナッソー夫人。発信，シモンド。

三十日 発信，デュテルトル夫人，フーバー夫人。午餐，シャリエール夫人宅。談，ルイズ [異母妹] 及び父について。終始，自説の主張は控目にしてしたが，余の考えがいかにももつともなりと言われ仰天す。夜，ロワ夫人宅。忌々しき 8，もはやなし，ありがたきかな。3 或は 1 2. 精神的に 3 は必要なのである。

#### 1806年 5月

一日 来信，デュテルトル夫人。待つことたが違いぬ。徒に百慮して肺肝を摧きぬ。だが心優しき女なり。発信，スタール夫人，シモンド。4，良。午餐，アルラン夫人宅。

二日 (金曜日) 4，昨日に及ばず。午餐，ロワ夫人宅。8，消滅す。

三日 来信，シモンド，オセールよりミネット。発信，デュテルトル夫人。4，優。ナッソー夫人宅にて晚餐，夜更し過ぎたり。

四日 発信，ミネット，シモンド，父。4，可。午餐，ナッソー夫人宅。オギュスト

[従兄弟] 訪問。無味無粋。夜、ロワ夫人宅。ローザンヌ、無味無粋。

五日 4, 優。午餐, アルラン宅。夜, ナッソー夫人宅。アントワネット, 気立て優しく愉快なり。

六日 来信, ミネット。2. 2. 3. 3. 3, だが毅然たるべし。発信, ミネット。4, 可。午餐, ナッソー夫人宅。新婦, セヴリー夫人 [従兄弟の嫁。1789年生], おしなべて何処も同じなる。

七日 来信, プロスペール, パラント父, シモンド, 父, ミネット。4, 可, だが, 或る章の筆を執るや必ずとっていいほど控えの他の章が眼前にちらつくなり。クリヨン氏 [仏の將軍。第三部会貴族代議員, 第三身分に与した最初の一人] 死去。廉潔ことごとく死に行きたるに厚顔いづれも存命して世にはばかるなり。ハルケンスキヨルド [デンマークの將軍, 記録作者。失脚ローザンヌに亡命]

八日 発信, シモンド, ミネット, パラント氏。4. 著書の後半各章草稿了。今なすべきは, 出発前に旧稿二点再読, 然るべき箇所を抜書してこの仕事完了を目指すべし。夜, ロザリーと。人生大失策を演じしは17年前の今日この日のことにして, そを拭いしは4年後のことなりき [最初の結婚と離婚]。晚餐, ナッソー夫人宅。

九日 来信, フーバー夫人。発信, ミネット, シモンド, 父。4, 可。原稿二点出発前再読完了のこと。パリ行まで1控えんものと決意す。これ余の能く守るところとならば心身の安らぎいかばかりならん。夜, ショミエール [ロザリー寄寓の別墅]。アントワネット, 愛想よし。

十日 来信, オギュスト [スタール夫人の長男, この年エコール・ポリテクニクに合格するもナポレオンに拒否されスイスに留まる], ミネット。悪夜。昨日の決意, 実行易からず。4, 進捗大。一章新設。紙幅拡張す, それとともに内容充実すの感あり。ロワ夫人訪問。

十一日 良夜。余が不眠の因, 夜更しが過ぎる, これに尽きるなり。一昨日の決意続行。発信, ミネット。4, 良。午餐, アルラン宅。夜, ロワ夫人宅。静かなる暮しこそ余のただ一つの願とあらばそはここに求められるべし。

十二日 4, 悪くなし。下僕一人新規に雇う, 目的はただ一つ, 余にとって1の適当な処理できるかどうか知るにある。リゼット訪問 [ロザリーの妹, 早くから「敬虔主義」運動に参加]。信心家のおつにすましたる。ナッソー夫人, 病。

十三日 発信, ゲクハウゼン嬢。来信, ミネット。発信, ミネット, シモンド, オギュスト。4, 良。処理の問題, 余の手に余るべし。ナッソー夫人, 病悩甚。

十四日 来信，シモンド。4，良。ここを発たんとの念きざし始む。晚餐，ナッソー夫人宅。リュウ嬢 [残された書簡で有名なアイセ嬢（コーカサス南西部出身のシルカシア人，4歳で身売りされパリに出る）の文通相手ジュリ・カランドリニの孫娘で孤児ジュリ・リュウのこと。コンスタンの祖母の庇護をうけ，当時はナッソー夫人宅に身を寄せていた]。人間はいとも都合よく自分の意見を忘れ他人を責むるが，責むべき相手が己自身であることあるべし。とにかく異様ことようの人なり，だが悪い人間にはあらず。

十五日（木曜日） 来信，ミネット。ミネットの心神やや復調す。行着くところは3。発信，ミネット，シモンド。4，捗るが，良しと見し章の中に出来の未だしいくつかあるに驚き呆れたり。午餐，ナッソー夫人宅。夜，ロザリーと。何れもミネットに勝るなし。

十六日 発信，ミネット，プロスペール。4，良。想イデおおくしてやや混乱生ず。

十七日 来信，ミネット，シモンド。尋常ならざるその計画。懸念すべき報。ミネット，何事も時間には任せられぬという。余が心，再び傷口開きたり。余は〈哀れ救い難き〉小人なるかな！4，想の渦巻くなか何とか漕ぎつけた。午餐，シャリエール夫人宅。

十八日 発信，ミネット，シモンド。4。主題の枠からあまりはみ出さぬこと肝心なり。「集会」別章削除。ミネットをめぐる心痛，不安動揺。

十九日 4，何とかこなす。心痛尋常ならざるあり。午餐，シャリエール夫人宅。憂慮つきず。

二十日 午前五時起床。毎朝かくあるべし。されば長き朝間の余得あり，しかも陰に沈みたる内省の環を断つの利あり。来信，ミネット。例の尋常ならざる計画を諦めたり。安堵す。発信，ミネット。午餐，メスにて。4，だが枝葉に過ぎたり。

二十一日（水曜日） 来信，父，ミネット，フルコー。4，完璧無欠。シャリエール夫人訪問。8 [結婚] をめぐり談。アントワネット差出されたり。辞退せしこと，いつか後悔あるべし。だが，ミネット不憫なり！

二十二日 8 深省。辞退過てりというもミネットの反撃の余りに烈しければやむなし。だが身を犠牲に供すともつまらぬ犠牲とは言ふべし。発信，ミネット，父，フルコー，シモンド。4，昨日に及ばずとも進捗あり。午餐，アルラン宅。夜，ドリニ。8，さほど無茶なことにもあらず。余の犠牲，せめてミネットの心に触れるを願うなり。出発，火曜日に決定，厳守のこと。

二十三日 発信，フーバー夫人，ミネット。余の身語みがたりに対するミネットの反応のいかなる

か知りたし。午餐，ナッソー夫人宅。8，千思百考。食指大いに動く。しかしミネットが！4。

二十四日 来信，父。その筆乱，気掛りなり。来信，ルコント。4，悪くなし。午餐，ドリニにて。アントワネット，愛嬌あり。

二十五日 来信，シモンド。発信，ミネット。8，もとより願うところだが。発信，シモンド。来信，ルスラン。4，纒。オステール夫人 [母方の祖母の遠縁] 訪問。アントワネット。余に何ほどか気ある風情なり。

二十六日 午餐，ドリニにて。アントワネット，情あり優あり。余のなし得るならば8。安心休息のなくてはあらず。

二十七日 来信，ミネット，シモンド。ミネット，二重の狂乱。ドール [コンスタンの父とその家族住む] へ来たしという。ドールは今いるオセールよりもなおミネットには所狭き心地すべし。驚天動地とはまさにこのことなり。2. 2. 2に復返りたり。発信，シモンド。来信，ミネット，矢文束<sup>やぶみ</sup>をなして到る。余の心中動揺騒然とす！事の次第はつきりさせ終結せざるべからず。もはや余のよく堪えるところにあらず。ミネットの空想癖，その性格，今の流浪の境涯あり。これを思えば余が我が身の安心休息を願うは一理のみかは千理あり。一方，身も心も千々に結ばれ鬱ぎたればこの安心休息余には叶わぬものなり。とにかく明日ここを發つ。行ってミネットに会い確たる態度決めるべし。午餐，アルラン宅。ここの連中が余に惜しまぬ親愛の情に大人しく甘えすぎるになにかある。されば幸福は「一般道」にしかあり得ぬものというべきや。ナッソー夫人に暇乞をす。8を勧められたり。こちらもその気充分なり。

二十八日 旅程，ローザンヌからコペ，アルラン同道。午餐，ノアイユ夫人宅。コペでシモンドつかまえたり。はつきりいえることただ一つ，纏<sup>もつれ</sup>を解すこと今や不可能なり。なし得るはただ一つ，切断，待ったなし直と切断するにあり。身は家族近親の咎にくらまさん。ミネットの計画なるもの検討し今後二月の間に決心すべし。

二十九日 朝から昼まで荷装と妄想にかきくれて過したり。如何なる身の上というべきや！かくてはあらず，けりをつけるべし。発信，スタール夫人。2. 2. 発信，ルスラン。なにがな出口を尋ねもとめて終日あてもなく彷徨いぬ。去る二十一日の辞退，過てり。二十一日付の手紙 [スタール夫人の] のあらんことかねて知らませば！

三十日 荷装了。妄想のはての結論。余の提案：或は相手を当地 [コペ，スタール夫人の実家] に連戻す，或は一緒にオセールに留まる，或は単身パリへ上る，あからさ

まなる田舎流浪さすらいはなきこと。来信，アルベルチヌ。旅程，コペよりジュネーヴ。余に出来るならば8。戦術は問わず。1。

三十一日(土曜日) 発信，スタール夫人。ジュネーヴにおける必要な用件すべて済ます。来信，父。午餐，ネッケル夫人宅。リエ夫人訪問。気持大いに揺ぎたり。だが、仮に3となるならばスタール夫人と結婚せざるべからず。執筆再開。

### 1806年6月

一日 ジュネーヴ発。ニヨン泊。発信，コペよりヘンチュ [スタール夫人等著名人と親交のあったジュネーヴの銀行家か]，ナッソー夫人，シャリエール夫人。

二日 発信，モレよりスタール夫人。ポリニイ泊。あらゆる点において13，風向相反する二つの嵐に襲われたる難船とでもいうべきか。

三日 ドール着。来書，スタール夫人より二通，シュレーゲルより一通。夫人，言うにも余の精神状態にあり。父，病なるも，明日出発せん。オセールへ急行し，またとって返さん。女乱心とあればなにはともあれ，病床の父を捨て置き徒に千里の遠行をせんとするなり。そも遊びに行かんとして子の義務を欠くにはあらず。

四日 父の病なお悪化す。出発不可能なり。発信，スタール夫人。4，少しく。

五日 ウジェーヌ，スタール夫人の書携えて到りぬ。如何なる火山といえどもこの女の噴火に勝る火山はあるまい。如何にせん。闘うは疲れる。今や計画というものなし。孤舟に身を横たえ嵐のさなか孤眠を貪る。もはや仕事せず。思うに学問が出来るのは一の僥倖なり，病に倒れなばたちどころに潰ゆることあるべき僥倖なり。さればこの僥倖，病に潰えたりと思うべし。4，今の余の状況においてはこれが最後の4となるべし。

六日 来信，ナッソー夫人。スタール夫人，転送便数通。父，回復に向かう。オセールへ発たん。発信，スタール夫人，ウジェーヌに託す。今回の余の「心境の変化」，余の幸となるか不幸となるか。残念ながら今の余の心，眠るを措いてもはや他になし。ヴィト泊。

七日 旅程，ヴィトからオセール。到着。乱心これにとどめをさすべし！来信，フルコー。

八日 談。将来の事，すべて混迷。発信，フルコー（為替手形1992リーヴル同封），プロスペール，ルスラン。

九日 脱稿済みのみでもかまわぬ、出来るだけ早く著書を完成させたし。4, 可。談、  
苛なく<sup>いら</sup>辛し。2, 避け難し。

十日 (火曜日) 発信, ナッソー夫人, 父。4, 可。

十一日 4. 胸部痛, 穏やかならず。

十二日 4. スーザ氏 [スタール夫人『コリンヌ』の主人公オズワルドのモデルの一人]。著作  
進捗するも時間の無駄大なるあり。

十三日 来信, 父, カランドラン。フルコー及びスタール夫人の転送便。オセールか  
らヴァンゼルへ居を移す。

十四日 発信, ナッソー夫人。4, 我が身の上の悪しき状況を思えばこの程度にて良し  
とすべし。

十五日 来信, ルスラン, フルコー。プロスペール到着す。よんどころなく明日また  
発つと言えば, スタール夫人激怒して狂いたり。この錯乱, いっそ神棚に崇め奉  
りたき代物なり。みだりに時を無駄にしてようやく4, 良。

十六日 「戦争論」の章朗読。余が願望のあれこれ, 折合つけ難し。4, 纒。

十七日 4, 進捗なきに等し。スーザ氏発つ。社交の和<sup>なご</sup>わしかる, 才の明敏なる, 清素  
質朴<sup>めて</sup>の貴なる。

十八日 忌々しき一日。心体寂寥, 胸潰るる思なり。喧嘩。世に在ること堪え難し。4,  
なし。来信, 父。

十九日 (木曜日) プロスペール発つ。4, 纒。悶乱苛立。余が人生の悶乱苛立の一大  
原因は1の欲求にして、この欲求, 真の狂気なり。それを満たさんとすればいかな  
る犠牲をも惜しむべからず。

二十日 〈パリ新報〉の記事 [パリの芝居小屋を8館に限定した参事会布告 (6月8日), 以後芝  
居は国家的興行となる。]。16. 16. 4, 不可。実りなき議論, 決着つけざるべか  
らず。

二十一日 発信, 父, ウッセ氏 [オセールの弁護士か]。忌々しき朝。ここ三月の間決着つ  
けんとの意かたし。アメリカ, パリ, 或は8. 4, 不可。

二十二日 (日曜日)。終日憂愁。4, 纒。エルゼアール。

二十三日 4, 纒。終日憂愁, さらに募りたり。

二十四日 発信、シモンド。エルゼアールの詩『悔恨』。その上の昔振<sup>かみ</sup>とでも言うべき、身憂<sup>みまう</sup>き趣味かな。それはそれとして詩句それなりに美し。結婚話。貰い受けるべきか。

二十五日 来信, ナツソー夫人。パリより悪報 [スタール夫人のパリ在留資格の件]。真の錯乱狂気。夫人の身の上の景, まさに傷ましく見るに見かねたり。恐しき一日。

二十六日 4, 少しく, だがなお悪日つづきたり。自らを抑え制するべし, 制すこと能わずは心を隠すもよし。生くること憂しといえども八月十五日までは我慢のこと。だがその時来たりなば決意あるべし。

二十七日 4, 可。1こそ我が身の不自由なれ。来週, なんとか調整はかるべし。午餐, ロマン夫人 [ヴァンゼル城館主の妻の姉。会食者いづれもジュネーヴ出身者]宅。ジョアノー・アギトン夫人懐旧, 余を愛し給いし最初の婦人なり[この逸話コンスタンの自伝的物語『赤い手帳』にあり]。

二十八日 4, 良。堪えるに足る一日なり。それはともかく, 1! 1! エルゼアールの喜劇。

二十九日 ヴァンゼルからオセールへ復。午餐, 知事宅。

三十日 来信, 父。発信, 父。パリへ発つ。シャラントン泊。

### 1806年7月

一日 東行西走[スタール夫人のパリ滞在許可陳情]。スタール夫人にとり前途暗澹。心中<sup>むづか</sup>憤る。午餐, ゲ夫人宅。夜, レカミエ夫人宅。1。

二日(水曜日) 発信, ナツソー夫人。来信, マランダン。発信, マランダン, 30リーヴル送金。訪問, ラクルテル。一縷の望。発信, スタール夫人。午餐, オシェ, プロスペール, シャルル, ドン・ペドレ [=スーザ]。訪問, レカミエ夫人, カトラン夫人, ゲ夫人。いぜん前途暗澹たり。

三日 せっかくのパリ, 愉快然しもあらず。フーシェと約。来信, リンゼー夫人 [昔の情婦]。《彼ノ人ラノトコシエノ火, 我ラノ灰ノナカニマデ埋火トシテノコリタリ》[トマス・グレイ:『墓畔の哀歌』引用英文]。発信, リンゼー夫人, 父。午餐, オシェ, ピスカトリ。晚餐, オシェ, プロスペール, スーザ, シャルル, その他面々。哲学的円座<sup>まどい</sup>の団樂, 感興なきに等しというも可なり。1。

四日 来訪，フォリエル。こちらが気<sup>きづ</sup>襟<sup>ま</sup>を合せ機嫌をとれば顔も見せぬがこの男のやり方なり。無視する態度をとればのこのこやって来るなり。発信，スタール夫人。フーシェ訪問。最後の手段なれども余には期待のきの字もなし。午餐，カバニ宅。来信，スタール夫人。

五日 パリに屈指退屈す。ルスランの『サルコフスキイの生涯』[ジョゼフ・サルコフスキイ，ポーランドの愛国者，軍人。ナポレオンの副官としてエジプト遠征に参加，カイロ暴動で死す(1789年10月21日)]。来信，父。8の提案。献身の決意，いささか揺らぎたり。来信，ゲクハウゼン嬢。

六日 来信，リンゼー夫人。発信，スタール夫人，リンゼー夫人。午餐，レカミエ夫人宅。夜，ゲ夫人宅。パリに屈指退屈す。1。

七日 来信，リンゼー夫人。4，少しく。午餐，ゲ夫人宅。楽しかりし事，今や楽しからず。ピカールの喜劇『操り人形』[運命の悪戯，或いは操り人形]1806年5月初演]。人間の品性の卑しさに終始する喜劇，あいなく疎ましき喜劇とは言ふべし。人の卑しさ，我ら浮世にて見飽かずや。いかなれば人間の汚辱をなお我らに見せつけんとする。

八日 レニョー訪問。1.『アンリ四世の死』[ルグーヴ作，五幕物韻文劇，6月25日初演]，(夫婦劇)とでも言うべきか。韻文それなりに美しく悪くなし。この芝居の値打，さすがアンリ四世という名に負うところ大なり。レカミエ夫人。ゲ夫人。来信，スタール夫人。

九日 発信，スタール夫人。午餐，レニョー宅。言うもはしたなきことなれども，「事業」には道理，条理は一切無縁の利害，常に絡むものなり。

十日 旅程，レゼルバージュまで。午餐，アミヨ氏宅。安心休息のあらばやと長大息す。文書，記録の類すべて整理す。幾多の友の死にたる！幾多の希望の違いたる！

十一日 来信，シモンド。シモンドの余が身の扱いよう，素<sup>す</sup>気<sup>げ</sup>なし。そは人の事，我が身にあらざればということなり。気の毒なればドワドンにかなりの金を融通す。騙されたということになるやも。午餐，アミヨ氏宅。良き隣人なり。

十二日(土曜日) パリ復。1.『大都市』と『小都市』[ピカールの喜劇]，ピカールの筆才，なにごとかポーマルシェのそれに通うものあり。夜，レカミエ夫人宅。晚餐，ゲ夫人宅。来信，スタール夫人。

十三日 来信，スタール夫人。マチュー。プロスペール。プロスペール，悩み煩いたり。疲労なるべし。並の疲労にあらず。だが回復するべし。それにひきかえ余ときた

ら…午餐，オギュスト。『包括受遺者』[ルニヤールの代表的喜劇，1708年]：浅ましくも味気なき芝居なり。夜，4。仕事できるとは思わざりき。来信，父。

十四日 朝から昼まで奔走。何たる時間の無駄なるや！発信，レニヨ，フルコー，父。来信，リンゼー夫人。発信，リンゼー夫人。午餐，オシェ，ルスラン。『アンリ五世』[デュヴァル作：『アンリ五世の青春』6月9日初演]，やや重苦しくはあれども傑作ならん。晚餐，ゲ夫人宅。明日，オセールに発つ。

十五日（火曜日） 出発準備。反モルレ記事[不詳，モルレは私の作家，政治家。シャトーブリアンの新カトリシズムを厳しく批判]。プロスペール，有無を言わせず世に出された<sup>いだ</sup>り。フーシェ訪問。一縷の希望も覚束なし。余が残し来たりし印象の不安。パリ発，レカミエ夫人同道。

十六日 早馬徹夜行。奇妙な夜。オセール着。来信，父，フーパー夫人。ヴァンゼル復。

十七日 準備不良，仕事不能，計画不明。余は相手に必要なれども充分ならず。8。8。取るべき態度これを措いて他になし。

十八日 優柔不断縄縄たり。計画決定。スタール夫人スパ[ベルギーアルデンヌ地方の温泉場]行。6週間の別離。覚悟の決め所なり。これを逃さんか，余が身の<sup>もつれ</sup>縛未来永劫<sup>ほく</sup>解れざらまし。結果は如何に。一日深憂。嗚呼，余に鉄心石腸の類あらましかば！

十九日 発信，シモンド，フルコー。深憂，一日無駄にす。何たる人生，嗚呼，何たる人生，怪しく不吉なる<sup>ほしまわり</sup>星廻なるかな！

二十日 発信，ビュイッソン[不詳]。4，少しく。朝夕，陰鬱なる会話。2。2。余は自ら苦しむとともにそれに劣らず相手をも苦しめるなり。二人が啞合い苦痛に喘ぐ，いったい人の生きるべき姿かは。

二十一日 4，やや復調。会話の陰，常に変らず。不言決断こそ余の為すべきことにあらずや。

二十二日 4，少しく。脱稿間近し。今後の計画論じ合う。生ぬるい態度を続けていたのでは我が身ますます窮すべし。マチュー，アドリアン[マチューの従弟，レカミエ夫人にはげしく恋慕]到着。相手の愛やみぬればアドリアンの想なお募りたり。これ恋の掟なり。

二十三日（水曜日） 4，少しく。来信，父。発信，父。

二十四日 4, 少しく。章一つ了。脱稿まで二つ残すのみ。すべてを勘案するにスタール夫人の状況好転, 本人の悲願実現間近と余は見る。夫人はかえってますます悲観焦燥するばかりなり。

二十五日 4, 少しく。波風さらに鎮まりたる一日なれども我が身の始末計らざるべからず。

二十六日 4, 少しく。夜, 喜劇芝居。アルベルチーナ, 愛らし。発信, フールコー, ロワ。

二十七日 レカミエ夫人発つ。4, 不可。昨日の仕事, 鑄直の要あり。

二十八日 4, 少しく。ジュリー [レカミエ夫人] に原稿の一部託せしめいささか不安なり。

二十九日 4, 可。脱稿間近し。父の件につき嘆願書を成す。1の然るべき処理法ついに得たり。来信, ビュイッソン。

三十日 (水曜日) 4, なさずに等し。来信, シモンド。怖気だつ恐しき喧嘩, 正気の沙汰にあらず。耐え難き悪口<sup>あつかう</sup>, 呪詛, 暴言。相手, 狂人と化し, 我また狂人と化す。如何にしてついの帰終に到るべし。

三十一日 発信, 父, 父のために成せし嘆願書同封。4, 少しく。別なる喧嘩。かくなる事々, 狂気の沙汰なり。吉報。スタール夫人とその敵との和解, 有り得べし。その敵とはまた余の敵でもある。連中が夫人とは和解するも余とはせぬことの可能性少なからずあり。余は我が事を犠牲に供し用なき身とはなりぬ。我が身, 落居<sup>おちい</sup>平穩に戻るとあらばもって賀すべし。スーザ伯爵きたる。旅行の新計画。

#### 1806年8月

一日 喧嘩余燼。4, 少しく。残るは章一つのみ, 後に控えるは決定稿。一月後了とならん。苦痛減じたる一日。晚餐後, 夫人の議論, かなり理あり。

二日 発信, ルスラン, フールコー, オシェ。4, 可。穏やかなる一日。仕事に掛るや心鎮まり嘆くこと少なし。

三日 4, 可。脱稿。次は論点の分類仕分。分類を始む。

四日 4, 良。再読校閲, 74章あり。1章校閲了。

- 五日 発信、ビュティーニ。4，良。夜、或る章を読む、傑作なり。レゼルバージュを思えば不可能なり [不詳]。〈ピュブリシスト〉紙上、プロスペールの投稿 [デカルト、パンテオンに祭祀の持説]。薄志弱行、鬱ぎの虫。
- 六日 4，可。悪報。この件、一向に終ることなかるべし。
- 七日（木曜日） 来信、フルコー。4，纒。荷造の明け暮れ。何たる身の上。発信、フルコー。行李到着。興味持ちし原稿見当らず。
- 八日 4，なさずに等し。要領を得ぬ報。シュレーゲル、病。我らの当地出発なかるべし。発信、シモンド。ドール行計画。ムール[飼犬]、噛まれる。
- 九日 4，怠る。来信、ルスラン。この報、利用のし甲斐のあらばこそ、反古に等しき報なり。マチュー、病、旅行の決行覚束なし。悪夜。1の解決、絶対的必要性なり。そを得るに何かは惜しかるべし。
- 十日 ヴァンゼルを發つ。終日深憂。午餐、知事宅[ヨンヌ県]。2. 2. つまらぬ芝居見物。獄舎に在るは別として、余よりもなお憂に胸潰して時を無駄にせし者一人として無かるべし。
- 十一日 マチューの報憂うべし。まとまる話の一つとしてなし。余が身の上、地獄と言わずして何と言うべきか！余が胸中、渾沌と言わずして何と言うべきか！
- 十二日 一日懊悩、無駄にす。少なくともここ8年来かくなる状況にあり。意志薄弱、何たる不幸！2. 2. 2. 2. いずれにしろ当面の予定決定と見る。決行は一月以内。
- 十三日 シュレーゲル、病篤し、しかもその〈小心翼翼病〉極まりたり。如何なる事態というべきや！
- 十四日 喧嘩に喧嘩を重ねたり。よく正気を失わずにいること、並大抵の事にはあらず。我が身、不幸のどん底を極めたり。
- 十五日 喧嘩、<sup>つら</sup>列きたり。2 [スタール夫人との関係を絶つこと]にでても相手の苦痛が増すわけでもなく、しかも余の苦痛は大いに減ずべし。シュレーゲル回復の期待。期待違いぬ。必要なればあっさり軟化したれども、間がな隙がな身を犠牲に供しながらその償いをすべて放棄せざるを得ぬ日がいつかはやって来ると思えば、この犠牲なすに辛き犠牲なり。
- 十六日 発信、父、為替手形500フラン同封。4，良。シュレーゲル回復の兆し。ぶり

返す。その精神状態信じがたし。〈小心翼翼病〉たるや不愉快なり。パリから医者と呼ばんと人を遣わす。医者の方には回復したるべし。この手合のドイツ人、如何なる人種と言うべきや！余の心、穏やかに澄ましたり、よって目下のところ苦しみ減じたり。だが状況の改善なし。発信、フルコー。

十七日（日曜日） 4、可。論点の分類おおいに埒りたるが、予期せしよりも時間取られる。平穩。しかし余が身の上、ますます紛糾錯乱するは例のごとし。喜劇芝居。当地、1は不可能。せつかくの機会、1無しを試みるに如かずや。当地からパリ復までの実験なり。

十八日 4、可。優柔不断、内争。料簡違いと利己主義。余はさらなる覚悟の自覚あれば精神なお安定したり。

十九日 来信、フルコー。4、良。ドイツの医師のこひょう小兵なる来たりぬ。この医師、才識そなわたり。かの国民、我が国民に勝りたり。

二十日 発信、フルコー、ルコント（生存証明書同封）。計画、理を踏みたる決定版なるが非情なり。嗚呼！およそ理を踏みたる計画にして酷ならざるはなし、しかも相手にはことさらそのように映るものなり。この計画、打つべき手の中では最善の策なるべし。4、良。何を為すべきか、思い扱いたり。

二十一日 相手と相談づくで新計画を定む。だが、余が嘗ての不安、現実となるべし。我が身の紛糾錯綜、嘗てなくあからさまとならん。パリに在って千思百考肺肝を摧くにいたらんとの予覚あり。4、良。

二十二日 発信、フルコー。4、良。

二十三日 旅立の支度。旅立の数を重ねて幾たびぞ！午餐、知事宅。

二十四日 来信、父。パリへ発つ。道中なかなか愉快なり。

二十五日 パリ着。来信、シモンド、ピュティーニ。発信、スタール夫人、ナッソー夫人。13. 父の転送便数通、嘆願書の不備なる一通添付。これを生かし利用して見るべし。来信、シャリエール夫人。持参金、倍增。8. 食指おおいに動く。発信、父。シャリエール夫人の書再見す。説明を待つべき一語あり。アントワネットを迎えるに際し余が払うべき犠牲に触れた箇所あり。1. 1の処理法、概略たどったり。発信、リンゼー夫人。

二十六日（火曜日） 4、少しく、悪くなし。明日、ブーレ[国有財産訴訟係]宛書状一通認める要あり。来信、リンゼー夫人。午餐、ゲ夫人宅。『ミトリダテス』[ラシーヌ

の悲劇]。この滞在恐しきものに覚ゆ。いっそのこと16[海外脱出]は如何。発信、父。喧嘩、諍の数を尽くし決意のたけを固めたあげくのはてが、どうしたことが、今、余の心3[スタール夫人]に傾きたり。

二十七日 発信、スタール夫人。4、少しく。朝、奔走。善人、朴直にして愚し、悪人、不快にして浅まし。発信、リンゼー夫人。

二十八日 4、悪くなし。プーレ宛書簡認む。来信、スタール夫人。発信、スタール夫人。夜、レカミエ夫人宅。晚餐、ゲ夫人宅。

二十九日 「偉人」[ナポレオン]の奇怪なる言葉[不詳]。安全保障としては余に不満のあるべきにもあらず、だが、これ正義なりや、侮蔑なるや。発信、シャリエール夫人。4、可。章一つなすも上出来なり。夜、ピカールの不作狂言。

三十日 発信、スタール夫人。レゼルバージュへ馳す。我が田舎、見れば美田。惜しむべし、だが... 夜、アミヨ夫人宅。パリにて1。

三十一日 必要なる本を探す。午餐、アミヨ氏宅。パリ復。来信、スタール夫人。

### 1806年9月

一日 発信、スタール夫人、アルジュヴィルの小作人女房。プーレに面会の約を求む。同じくフーシェに。書類整理。オセールの知事と談。平坦渺茫たる国原。夜、レカミエ夫人宅。

二日 4、悪くなし、書類すべて整理す。午餐、サン・トバン及び他の面々。来信、シモンド。午餐後、大熱。

三日 ミネットを巡る会話、他の話にまして面白し。発信、スタール夫人。終日、病。孤立鬱悒。孤立して独り暮すには壮健であるべし。身の整理つかぬまま年積みたり。

四日 いぜん微恙。発信、父、スタール夫人。来信、スタール夫人。いぜん病。一日無駄にす。

五日 来信、スタール夫人。未だ病はれず。仕事なし。朝も終らんとする頃、4。

六日 来信、父。午前中一杯奔走。プーレに会う。この件、救済難し。発信、スタール夫人。好ましき報、だが信憑性怪し。悪神も戯れにこれにまさる強欲女は世に生すまじ。芝居見物。リンゼー夫人再会。夫人に対する一切の感情、余の心より

消滅せり！愛とは異なるものかな。

- 七日 来信，リンゼー夫人。とすると女の愛は決して已むことのなきか。だが夫人の心は余自身に執着する以上に己自身に執着するのである。オシェ，フォリエルと談。余が著書，なにがしか世間の耳目をひくことあるべし。来信，アルジュヴィルの小作人。発信，アルジュヴィルの小作人。来信，ナッソー夫人。午餐，スーザ氏宅。
- 八日 発信，スタール夫人（筆調やや手厳しく），父，シモンド。オギュストの試験ぶじ終る。来信，スタール夫人。シュレーゲル奴，病再発す。発信，再度スタール夫人。
- 九日 ガラ訪問。小昼餐，コンドルセ夫人宅。来信，スタール夫人。来信，リンゼー夫人。「会ってくれと貴男につきまとわれ迷惑だ」との文面あいかわらずなり。憚りながらこの女の一人や二人，無くて一向かまわぬ身なり。発信，スタール夫人。午餐，ピスカトリー宅。発信，リンゼー夫人。
- 十日 発信，ナッソー夫人。4，良。午餐，オシェ宅。オギュスト，成績優秀賞。夜，レカミエ夫人宅。ミネットの件，明後日些かなりとも良き方に始末つけたし，これ余が望外の喜ならん！来信，スタール夫人。
- 十一日 発信，スタール夫人。4，良。
- 十二日 フーシェ訪問。ルーアン案かたまる。地の利やや難あり。オギュストと午餐。数箇所訪問。つまらぬ芝居。
- 十三日 4，なさずに等し。『ヨセフ』[オシアンの翻訳とナポレオン讚美で知られた仏の劇詩人ラウール＝ロルミアン作。9月13日初演]，山鳥の尾の長き牧歌にして筋なし。中に美しき詩句いくつかあり。晚餐，ゲ夫人宅。
- 十四日（日曜日） 荷造。荷造に明け暮の人生かな！発信，ドワドン，父。来信，スタール夫人。午餐，レカミエ夫人宅。1。
- 十五日 午前中，奔走。エタンプへ発つ。車損傷。エタンプ着。発信，シャントルー[仏の化学者，ナポレオンの内務大臣，上院議員]
- 十六日 余の小作地に赴く。小作人生活，馬鹿貝にも似たるかな！極楽とはこれをしを言うべきか。スーザ氏発つ。
- 十七日 旅程，エタンプからマント[ここでスタール夫人と合流，ルーアンへ向かった模様]

十八日 旅程，マントからルーアン。「息子汝に似たり」とスタール夫人に言えば立腹す。ルーアン着。殷賑きわめたる大都なり。ここにて大人しく二月暮らすべし。しかる後、レゼルバージュ、或はジュネーヴ、ローザンヌ。余所を徘徊放浪のなきこと。この間、著作完成のこと。

十九日 サヴォワ＝ロラン[セーヌ下流県知事・首都ルーアン]。現体制[ナポレオン帝政]の及ぼせる影響、天下あまねく皆同じなり。こちら、余が人生があまねく影響を受けし出会[スタール夫人との]から12年。発信、フルコー。午餐、知事宅。千篇一律、虚栄の国民どもよ！芝居、喜劇。

二十日 来信，マリアンヌ[義母]。身の上を処さんとする父が手際、日を追うてますます怪しくなりぬ。皆が望むとあらば、8. 4、少しく。心憂し。夜、喧嘩。

二十一日 来信，シャントルー氏。4，可。1を求め無駄足を踏みたり。報。事態逼迫す。嘗てのごとき展開と相成るや。

二十二日（月曜日） 発信，マリアンヌ。4，良。「産業」脱稿予定。1を求め再度無益な試み。芝居見物。『アナクレオン』[オペラ、作者特定できず]。似<sup>おろから</sup>愚しく甘たるき芝居なり。

二十三日 発信，シャントルー氏。4，良。観劇。1の手蔓、二三掴みたるも、オギュストにつきまといわれたり。

二十四日 来信，父。4，良。芝居見物。ついに1の解決手段、尋ね探し当てたりと思う。結果は明朝。

二十五日 発信，ルスラン，父，オシェ。来信，ナツソー夫人。1。げに化粧は化物なるかな！4，可。フリードリヒ[シュレーゲル弟]，スパンダウに。

二十六日 馬上散歩。4，纒。夜、カバノン夫人宅[ルーアンの豪商]。

二十七日 4，不可。ミネットに吉報。

二十八日 発信，フルコー，ラムルトのブーレ。4，可。「産業」の段、再読。満足一入<sup>ひとしお</sup>なり。

二十九日 4，可。午餐，ロモニエ夫人宅[ルーアン市立病院外科部長の妻]。芝居見物。

三十日 発信，シャントルー氏。戦の報[普の最後通牒をうけナポレオン出撃]：《黎明暗転シ、暗キ朝ハ始リヌ、カトー及ビローマノ運命ヲ決スベキ宿命ノ日、黒雲重ク、

ツイニソノ日ハ来タレリ》[ジョーゼフ・アディソン：『悲劇カトー』。引用英文，原典と異同あり。コンスタン，ナポレオンの敗北を期す]。4，可。1の処理法解決せしよりこのかた，そのこと今や頭になし。方便あれば足る，敢えて用いるに及ばず。

### 1806年10月

一日 4，可。身辺平穩なれども，心底に憂怖愁慄<sup>ゆうふしゆうりつ</sup>の居座りたるは常に変らぬことなり。

二日（木曜日） 発信，コレフ [独の医師，作家。1804年よりパリで開業]，ウジェーヌ。胸部軽痛。4，少しく。進捗遅々。

三日 来信，フルコー。言いつけし用をなさざりき。来信，マリアンヌ。この女に邪念のあるは疑い得ぬ事実なり。小昼餐，サヴォワ・ロラン宅。発信，ナッソー夫人。4，可。

四日 目下の仕事 [政治論集縮約版] に掛りしより今日で8月になる。始めはまる一月で脱稿と踏んでいたが，たしかに枚数が大幅に増えたこともある。4，少しく。クリヨン氏 [仏の將軍。5月7日参照]。清高，誠の君子なり。

五日 4，少しく。仕事進むも気持ちに反し緩歩なり。脱稿まであと一月は無理なるべし。1に関する情報いくつかつかつむ。明日確認のこと。

六日 来信，バルドバ [不詳]，アルジュヴィル買付に関して。この便に返。4，進捗なきに等し。我が心，仕事に臨む用意に遅れあり。この冬はともかくその後は何とか余裕を持って望むべし。1に必要なもの，ついに探し当てたり。1。

七日 発信，ゲ夫人。4。浄書，推敲過度に及び，修正変更の堂々めぐり止まるところをしらず。

八日 来信，父，ジュリアン・スエ [在オランダ財務省収入課長]。発信，父，スエ，フルコー。4，良。ティエッセ [ルーアンの弁護士]。プロスペール着。プロスペール，己の新しき道において日進，技を磨きつつあり [スタール夫人の寵を得ることか]。来信，フルコー。

九日 来信，シャントルー。発信，シャントルー，ゴベール [旅団長?]，マリアンヌ。4，不可。仕事する気分にあらず。我ら二人打つ手なし。世の道に違う今の余の身の上なれば我が不幸は絶えることなからん。この身の上を変えんと欲すれば相手は怒号狂哭もて抵抗する，これを思えば，忝なしもったいなしとこれ以上相手に頭を下げていられようか。されば，2に回帰，そしてまさにそこから8，或は

16に回帰となる。

- 十日 来信, デュテルトル夫人。予期せぬことなり。12, あり得べし。だが, 手綱を締めて掛ること肝要なるべし。返書, デュテルトル夫人。可能な限り速やかにパリへ上らん。4, 少しく。オシェ着。12を思案。大なる困難いくつかあり。その解決, 即刻ことに当るべし。
- 十一日 来信, フールコー。余の小作農地 [アルジュヴィル農地, 売却先検討中], 60.000リーヴルで手を打つべきか。4, 纒。1. 原稿数章朗読。評判すこぶる良。
- 十二日 発信, デュテルトル夫人, ボワヴァン [代訴人?]. 千思百考の末, 12断念。同じするなら8遙かに勝るべし。二者択一ならばどうしても汚点なき者となろう [デュテルトル夫人人妻にして離婚歴あり]。4, 良。
- 十三日 発信, アルジュヴィルの小作人。4, 可。2にして3, 結局13 [迷い], 情けなく憂し。
- 十四日 来信, デュテルトル夫人。かくも長きかくも優しき夫人の愛情, 余の琴線に触れたり。12, 2年の間隙 [12年か。10月24日参照] あってもって喜ぶべし。発信, ルコント, デュテルトル夫人。4, 良。2. 2. 深憂。微恙。オシェ出発。
- 十五日 4, 良。だが別の発想あって然るべし。夜, 原稿の一部読む。傑作なり。本人は然あるべく信じて疑わぬが, 良書との評得ること有りやなし。1.
- 十六日 (木曜日) 来信, フールコー。農地に新提案。フールコーに返。断りたるも, 我が身パリに在らば買手に応じるはずなり。4, 相変らず牛歩にも劣りたる。脱稿ゆめあらざるべし [ここで放棄, 10年後再開, 『代議政体に適応されるべき政治原理』として1815年刊.]。2. 2. 1の漠とした目論見。相も変らず同仕事の繰返。余が優柔不断も代り映えなく単調とはなりぬ。
- 十七日 来信, ルコント, ゲ夫人, オシェ。驚くべき報! [イエナ戦役, 仏軍勝利. 10月14日]。アフリマン! アフリマン! [ゾロアスタ教の破壊霊]。発信, フールコー。アルジュヴィル売却に付したし。16. 16. 16. マチュウ着。4, 少しく。斯くなる事態万端のただ中に身を置き仕事に掛れるは人間業にはあらず! 夜, 喧嘩。2, だが如何にして。
- 十八日 出立, パリ到着。来信, フールコー, デュテルトル夫人, ロワ, 父。12に臨んでは手綱を締めて行くべし。芝居見物。『ガストンとバイヤール』[私の「国民的悲劇」作家ペロウ (1727-1775) 作, 国民的英雄 (騎士バイヤール) を題材とした]。タルマ, 華麗, だが, 戯曲の余りに愚作なる。観客, 冷やか。夜, レカミエ夫人宅。

ミネットには憂うべき報、プロスペールもたらす。少しく誇張もあるべし、だが、事の内容憂うべし、いぜん好転なかるべし。

十九日 発信、父、スタール夫人、デュテルトル夫人、アレクサンドル、ガラ、ロワ、フルコー。ミネットに関する報、好転す。これをもってしても事態の解決怪しかるべし。デュテルトル夫人訪問。その色香、見違えるばかりなり。相手に我が意通じ始めたりと思う。これに間違なければ12で行くべし。午餐、プロスペール。念は今夜シャルロット〔デュテルトル夫人〕と一線を越すにあり。十三年の抵抗、遅きに失すると言うべし。首尾は明日の記述に。夜、スタール夫人に一筆。

二十日 シャルロット身を任せたり。従って1〔交接〕。女の安からぬ頭を鎮めんとして、事後、傾身して手を尽くしたり。余が介抱の効を期す。12を巡る余が心の迷はげし。余に対する悪口謗言の凄まじきこと！昨年の紛糾ごとくの再来、金輪際ごめんこうむる。発信、スタール夫人。午餐、シャルロット宅。再度、1。このたびは否諾いなせの曖昧を窺うかがわせる気色もはやなし。嗚呼、女のこれに夢中となる、いかばかりなるや！かくて今宵の予定すべて反古とするはめにあいなりぬ。

二十一日 来信、スタール夫人。帰り給えと余を悩まし、自分の件は余に任せたくなしとさえ言う。2。2。何とかして、しかも今冬、2に漕ぎつけるべし。発信、スタール夫人。新たなる報。彼方の愚、此方の幸福、これに勝る愚も幸も想像するに難し。1の試。何がな不快ならざるものをこれに求むるは馬鹿の骨頂なるべし。夜、デュテルトル夫人宅。優、和、情あり。然り、12で行くべし。

二十二日 ミネットのために奔走す。奔走厭うべし。今冬、2。発信、スタール夫人。悪天候、シャルロットとの田舎行怪し。午餐、オシェ宅。ピション〔仏の外交官、後のウェスファリア王ジェローム・ボナパルトの側近〕、明知また善心の士なり。悪天決行。夜、シャルロットと。優と媚の天女とも言うべき！これまでの半生涯、余は如何なる運に違いたるや！12。12。1。

二十三日 シャルロットと我が田舎でんしやを巡る。余が愛、刻一刻、いや増しに増したり。繰返し言わん、《ソハ天女ナリ》と。出立せんと欲すれば、馬いかじうま、不往馬とはなりぬ。シャルロットとあらためての夜。12。12、嘗てなく強し。2。2。1。

二十四日（金曜日）パリ復。12。来信、スタール夫人。2。発信、スタール夫人。かくなる隷属もはや耐え難し。日に異にこの関係を絶つことの緊要ますます高じ、しかも絶たんとする痛みますます軽減すとの感あり。シャルロット。12。12。夜、シャルロットと。常に変らず優しく情あり。かくなるを12年前拒み追遣りしは、嗚呼、乱心の極なりけり！「独り行ク」との氣逆きのぼせの極なりけり！その氣逆のなれの果て、世に二人なきの頸木に繋がれたり。

二十五日 本日、齡四旬、四十年目に入りぬ。《歲月ノ流レ行クハ矢ノ如シ》[ホラティウス 引用ラテン語] 来るべき10年、生き長らえるとして、昨日終りし10年に劣らぬ不幸に身を晒すことなきよう努めるべし。それも叶わぬとあらば即刻このまま死すに如くはなし。発信、スタール夫人。我が心、シャルロット充滿ち、我が頭動乱し、なすべき義務、日毎に余所事になりゆけば、なお重くし掛り苦痛の種とはなりぬ。午餐、シャルロット。1. 甘・福・哀の宵の一刻。恐らくは最後の宵ともなるべし。やんぬるかな！いかなる天女を拒み追遣りしか！今、余は愛のまつたき激情の虜とはなりぬ。我が旧りにし心のかくも敏感なるとは思わざりき。1 2. 1 2. 1 2. これ余が唯一の願、唯一の望なり。クワニィ夫人 [侯爵夫人、当代きつての才女の一人] 訪問。機知溢れんばかりの才女。

二十六日 物狂おしき一日。恋焦錯乱。如何なればかくなる狂気錯乱とはなりぬ。10年前の余には無縁のものなりき。来信、スタール夫人。夫人に返。だがすべては覆りぬ！余が欲するはシャルロットなり。万事を賭すとも余が欲するはシャルロットなり。一醉を求めんとして試したるが、かえて愛恋いやましその虜とはなりぬ。シャルロットより短箋。何と、余には会わぬ覚悟と言う！一週間前シャルロットを拒み斥けんとしたるはこの余自身なり。余はまさに狂いたり。発信、シャルロット。余はシャルロットを欲す。発信、シャリエール。宵間から夜、当なく興なき訪問数箇所。狂気の沙汰なるべし。シャルロットは余が繰返し拒み斥けし女、その常の据臆は辞して食わず、逢看合流の計立つるを許しつつその都度水を差し失望させし女、一年半前、哀れとだに思うこともなく見限りし女、書き遣りし素気なき便数を重ね、それを相手から奪返したるはつい先週の月曜日のことなるが、他ならぬこの女に血迷い、会えぬとあらば胸潰るる騒なり。スタール夫人のこれに与るところ大なるべし。夫人の剛情、利己主義、我身執着、シャルロットの柔情、落着、心身自讓、兩者対照すれば余が遙かにシャルロットに親近惹かれるは言うをまたず。その鉄腕にここ十年来押えられてきた「男=女」に倦み飽いたる今、男ならぬ真の女に逆せ悩殺されたり。2. 2. 嗚呼！実行、言うにや及ぶ。しかも遠からず、そして天の加護あらば1 2. 衆評口端恐るるに足らず。

二十七日 狂乱の夜、昼に劣らず。今の余の胸の痛、未だ嘗て知らざりき。余は愚なる動物なるべし。惚れずに女に恋を仕掛け好きにさせる。すると俄に余が心中、恋の波、渦をなして巻上がり、関係を持たんと欲したるは全くの一時の気慰なるが、その結果たるや我が身の転覆となるのである。これぞ動物ならぬ人間の定さだめと言うべしや！来信、シャルロット。「二時に会う、貴男の便は人の心を傷つける便、貴男という人間が分からなくなった」とある。思うにもっともなことなり。三日前の余はいと優しく度量寛き男にして、相手に実に真面目な助言を与えたり。余の心を危ぶみ疑いつつもなお情を深めしは、恐らくはこれがためであろう。いずれにせよ、今の状態は終りにせねばならぬ。我が身の上たちどころに解決せんとは思い寄る由もなかりき。可能ならば1 2. だが、余が心のためにも平常心に立返るべし。相手の心が決りしだい2, そして順次、父、ローザンヌ、待機。シャ

ルロットと散歩二時間。愛しき天女！余が失いし宝物の如何なるや！そを我が物と所有できる希望ほぼなし。深き憂に沈んだり、だが、この憂、一週間前嘗めさせられし冷たく乾いた悲哀とは別物なり。明日またこの天女に逢う。来信、父。父が要求のもの送るべし。来信、スタール夫人。この女もまた余を愛すといえども、違いの何たる！来信、シャントルー。レクリニエ [狙っていた土地の何か] 売に出る。今となつては何かはせん。発信、スタール夫人、メラン、ラベルジュリ。

二十八日 明日発つ。今朝、ミネットの件、少時奔走。本人の感謝は期待すべくもないが、この件に対する余自身の意地は捨てぬつもりなり。シャルロットと散歩。いつ見ても優しく寛大なる天女かな！余のものとなるべきや。人間と人間世界の<sup>いとなみ</sup>営為を遙か遠くに<sup>かいな</sup>して、この天女の<sup>いだい</sup>腕に抱かれ我が生を営むことあるべきや。プロスペール、オシェと午餐。プロスペールに暇乞をす。ドイツの陸奥に旅立つなり。この男、深く敏捷なる感覚の持主なり。シャルロットを待つ。傍らにシャルロット侍らせ宵の一刻。1. 初めて聞く快と苦の<sup>ないまぜ</sup>絢交。余が生涯、最も心ゆきたる心地の夜。シャルロット、その<sup>なんびと</sup>発想、優雅愛嬌あふれ、その余を愛するは嘗て何人もなさざりし愛し方なり。何はあれ、1 2. 論ずべき問題に<sup>いと</sup>あらず、神聖なる義務なり。涙の雨、懊悶のシャルロットを<sup>い</sup>後にして別れ来たりぬ。愛おしきシャルロットよ、余が幸福は汝の賜なり、余生きて<sup>い</sup>あれば汝にも幸福を与えん。今はデュテルトル氏の<sup>い</sup>出方を待つ。発信、父、為替手形300リーヴル同封、ルスラン、シャルロット。ルーアンへ発つ。

二十九日 旅程、パリからルーアン。マニィ [パリ61キロ] からシャルロットへ便りす。興奮醒めつつあるも、あの天女を恋する情に変なし。ルーアン着。家内全体沈鬱重し。さすがにところ狭き心地す。余は何をなすべきか。奉仕怠りなく<sup>たくい</sup>慎みて控えながら、情に置いて<sup>かな</sup>忍びがたければ<sup>い</sup>隠し通すべし。だが嘘偽りに<sup>い</sup>通ずる類の一つとして余が胸を痛めぬはなし。アルベルチーヌ、愛し。シュッシェ [仏の元帥、ウルム、イエナの戦役で軍功あり]。

三十日 来信、シャルロット。かくも深くかくも優なる愛情、他の<sup>い</sup>何処にもなかるべし。嘗て乱心の余り拒み捨てしを今取戻したるも、幸福の幾歲月<sup>い</sup>失いたりしか！発信、シャルロット。我らの物語となるであろう「小説」の筆を執る [『アドルフ』となるものだが執筆時の構想はシャルロットをまじえた自叙伝小説]。これ以外の仕事いづれも<sup>い</sup>為す能わず。厭、物憂の夜。喧嘩。非は我にあり。当り障りなく、能う限り<sup>い</sup>相手を傷つけぬがよし。嗚呼！それにしてもいづれ或る日また人を傷つけざるを得ぬ余が性情いかんともし難し。

三十一日 (金曜日) 発信、シャルロット。嘗てなく1 2. 発信、シャントルー氏。胸中安らかならず。余が望、シャルロットと一緒にの安心休息を<sup>い</sup>措いて他になし。懐かしき思出に再び巡り<sup>い</sup>会わんこの「小説」の筆大いに<sup>い</sup>進みぬ。危機また進む。幸い

なるかな、この仕事、今の余の慰となるべし。

1806年11月

一日 来信、シャルロット。シャルロット、病、恐らくは篤病ならん、だが病人の傍らに居てやれず。発信、シャルロット、フールコー。不安のしからしむるところ、寒心に堪えず。「小説」の仕事続けたり。天女の描写、なんら腐心するには及ぶまい。平穩、だが気詰の夜。巧偽虚言、自責の念にからる。偽嘘に自ら苦しむ。

二日 今朝シャルロットより来書あるや。来書なかりせば哀れ不幸の最たる者とならん。来書なし。怏怏千苦！避けがたき事のなりゆき、複雑千万。発信、シャルロット。「小説」の筆大いに進みぬ。シャルロットを思えばこの仕事心ゆきたり。しかし、来書、来書一通、天にも祈る気持なり！明日、便りなければ余の絶望言うべくもあらず。

三日 シャルロットより来書、だが、その筆跡日頃のかげをとどめず。病盛<sup>やみさかる</sup>まぢがいなし。夫、近々帰還、シャルロットすべてを打明けん。如何なる事態となるか。昨日は嵐なき一日。ゆくてに嵐の幾つ控えてあるらん！発信、シャルロット。シャルロットの身を案ずる恐怖おさまらぬまま一日暮しぬ。天女なる汝、天余に与え給う、されば余が地上に望む宝は汝を措いて他になし。

四日 シャルロット、来書なし。思は辛し。だが郵便定期便は二日に一度ということかもしれぬ。確認した記憶あり。発信、我が天女。夜、余の「小説」を読む。一本調子に陥りたり。構成変更あるべし。

五日 便りなし。明日まで待つ以外になし。来書完全に絶ゆることあらば、如何にせん。発信、シャルロット。「小説」を続けるが、お陰でシャルロット余が身近に在り。午餐、知事宅。多弁をもって思を紛らさんと努む。人間の頭の支離滅裂、恐るべし。ヴィマール [ルーアンの法律家、政治家]。昔、恥ずべき貧賤あり、今、恥ずべき富貴あり。

六日 今日来書なければ明日下僕をバリへ遣わすべし。何としてでもあれの様子知りたし。嗚呼！余が幸のすべてはあれの腕に抱かれて暮すことにあり。シャルロットを片時去らず恋い求む。12年前、今よりも若く美しきシャルロットを拒み斥けたり。来信、シャルロット。侍女代筆の書なり。いまだ病篤し。余は希望を捨てず。会いに行くべきだが、二の足踏み行き悩みたり。踏出せばすべて台無しとなるべし。余が事に当るに薄志弱行もまたある。だが、余が愛は心魂に徹する愛なり、生きてあらんと欲する目的はこの女を措いて他になし。発信、シャルロット。終日、胸塞ぎて息絶えんとす。目に涙差<sup>さし</sup>含まずして物言うこと能わず。

七日 嗚呼！今この時、シャルロットなにをなすらん！天よ、いざシャルロットを我に返し給え、シャルロットを幸福にせんがため、与えし苦痛の償をせんがため！便りなし。さこそは驚かぬが堪え難く辛し。シャルロットに手紙を認む。この手紙、火をつけ燃やしぬ。恐しき一日。告白 [スタール夫人から見せろと強要され火にくべて燃やし、それに続く喧嘩の中で一切を告白した]。2、決定的。一切決裂。脳天割破。出て行きたし。残ればあるは喧嘩囁合のみ、余は鬼の様相を呈すべし。天よ、我にシャルロットを、さもなくば遁走、孤身存命の力を与え給え。明日は如何なる風の吹くらん。

八日 発信、シャルロット。穏やかになりたる会話。このままおして行くべし。修復は不可能。来信、シャルロット。病、やや回復す。行って会うべきところだが。発信、再度シャルロット。余は為すべきことを誰にも為してはおらず。気詰の一日。苦痛の会話。決意断行の目に見えて明らかなる危険、本人の余自身もよく承知するところなり。しかし、シャルロットの仮初めならぬ愛、優しさ、純心、ただならずかくあれば、シャルロット、幸福を得て然るべきなり。その人生を攪乱転覆させた今、この手でシャルロットを幸福にする、これ余の願なり。だが、この件くだりに触れられし言葉、余をいたく傷つけたり。ここに記す気にはなれず。

九日（日曜日）シャルロット、来書なし。昨日の筆跡まだかなりの乱みだれを見せたり。余に会えばシャルロット喜ぶべし。必ず近き内に会うべし。発信、シャルロット。次の日曜日出発と決定。これ実に間緩まぬるきことなり。相変らず陰、悲しき会話。覚悟まさに揺らがんとす。されど我が心よく再びシャルロットが許に戻りぬ。かくも優なる愛を前にして理なき思案は要らぬこと。

十日 来書またなし。ゆゆしき恐怖不安に再び落込みぬ。発信、シャルロット。動揺深甚きまわりたり。この週、長いとて終のなきにはあらず。「エレノール挿話」書きすすむ [この挿話が結局『アドルフ』となる]。この「小説」完成に漕ぎつけるに足る根気の余に在るや大いに怪し。

十一日 落着かぬ夜。理なき思案の亡霊、余が胸中に目を覚ますこと一度ならずあり。つまるところ一の状況を脱出せんとすれば別の状況が待っているということか。余が心底に人を恋うる心あるもまた事実なり。来信、シャルロット。目に見えて回復す。こちら目に見えて安堵す。シャルロットの協議の結果がどう出るか。予想つきかねたり。発信、シャルロット。

十二日 考を重ねるにつれ12の理ことわりなることの感ますます強くし、12容易たやすしと思うことも時にあり。その後にくるのは、休息と学問と隠遁。愚の数を重ねし後、我が身うまく治めたりということになるか。運命の神よ、余が久しく懐きし人生門出の希望、計画に天罰を下し給うな。来信、父、シャリエール夫人。発信、シャルロット。来信、ルスラン。発信、ルスラン。これらの交渉談判、いずれもなく

もがなのこと、身を安んじ我が天女と落ち居る、余が切なる願なり。夜、「挿話」を読む〔或は人前で朗読か。15日付スタール夫人の他人宛書簡に、「コンスタンが小説に取掛りました。これまで読んだ中で最も独創的、最も感動的な小説です」との一節がある〕。感動深いものありと思うが、この「小説」続けるには荷となるべし。

十三日 シャルロット、来書なし。便り無くして二日を送る、そのつど耐え難き苦痛に直面す。発信、父。「挿話」進捗大。この「挿話」を「小説」から独立させて刊行することを控えるには幾つか理由あり。

十四日 来信、シャルロット。シャルロットの例の不安、例の如し。シャルロットの避け難き神経動揺、シャルロットのために恐れる。また、多分、夫は「引離策」〔1年間相見禁止、その後離婚に应ずとの条件〕に出るべし。危急切迫す。発信、シャルロット。無下無益、辛き会話またあり、弁解は余の望まぬところなれば、相手の責むるにうちまかせたり。「挿話」ほぼ完成。夜の執筆、目に毒なり。嗚呼！怪しき観念に流されることなく身を確と定むるは何時のことなるや！身の安定、何物にも代え難し。2. 1 2, なお思うだに恐しきことなれども、不幸にして1 2 叶わぬとあらば、何はともあれ8.

十五日 来信、ボワヴァン〔代訴人〕。新たなる面倒。止むことなき訴。そうせざるを得ぬからには、嘘と遁辞で立回るべし。「小説」に掛るも心いかず。今の情けなき身の上をもってして如何なる仕事なれば心樂しかるべきや！将来の新共同計画。《蛭ハ皮膚ヲ離レズ...》〔血ニ飽カザレバ：ホラティス 引用ラテン語〕

十六日 来信、メラン。シャルロット、なし。事情判然とせず。余の火曜日付便り受取っているはずなり。内容が内容だけに動揺はげしく、病再発せしか。夫、暴力に訴えしか。かくなる不安どつと押寄せ苦痛に苛まれたり。発信、シャルロット。喧嘩、久しく避けんとするも甲斐なく。暴力。最後は有情、しおらしく。これに触れ感動きわまるも、余には為す術なし。この状況を延ばし延ばしにすれば、ますます余は相手を虐待し、相手からは鬼と見られるだけである。シャルロットの見込につき何か分りしだい即刻父の許に急行する、これ絶対的要なり。天よ！明日便りのあるべくはかり給え！

十七日 来信、シャルロット。夫、同意す、判然せぬ二つの条件付きながら、とにかく夫同意す。優しく愛おしきシャルロットよ、汝、余の手で幸福になるべし。シャルロットとの暮しに余がかけし期待のたけ言うべくもあらず。期待の因つてきたるところのものは、シャルロットの魅力のすべて、余の過ぎにし生の嵐騒暴雨と禁欲欠望なり。運命の神よ、余を欺くなかれ！発信、シャルロット。急ぎ慌てて、余の幸福のすべて存分に筆にせぬまま終りたり。2 とともに大人しく努めて暮すべし。決裂の波乱を減ずること、余の能くするところにあらず。今は決裂の用意は控え、出来るだ相手に尽くすべし。

十八日 発信, シャルロット。昨日の便り, いぜん謎として残れり。かく女が曖昧に言うには夫の条件に問題のなからざるべからず。土曜日様子分るべし。「小説」かなり捗る。難しき夜。喧嘩避けて外したり。余を脅かす喧嘩, これより金曜日まで同じく避けたり。嗚呼, 今のこの生活に倦み疲れたり!

十九日 来信, シャルロット。例の条件, 察知す。財産過大にふっかけられたるべし。額の程度は判然とせず。2を願うこと切なるものあれば, 条件がまったく話にならぬは例外として, 難しいことは言わぬつもりなり。決定は土曜日。来信, フールコー。発信, フールコー。会話, 相手が何事も諦めざりしことはっきりす。為す術なし。この女に仕えることで, 余は我が身のためにならぬことをしているのである。暮したき国にせつかく暮しながら, 女にせつせと機会を与えては余に怒をぶちまけさせているではないか。だが一方では女の信頼を裏切ることは出来ぬのである。《道ガ拓ケルカドウカ運命シダイナリ》[ウィルギリウス 引用ラテン語]

二十日 昨日の宵の何と騒々しきこと! 己の手段を常に外に求めんとする人間の何と煩わしきこと! 平穩なる一日, 優しき宵。スタール夫人が優れた能力を備えたること, 確かな事実なり。だが, 余がその生活の中枢たること絶対になし。安心休息に恵まれること絶対になし。許されるならば12。明後日この時刻, 判明すべし。出発に臨む余が心ほど裏腹なるものなし。別れ来し者に後ろ髪ひかれるのが常なり。

二十一 (金曜日) 旅程, ルーアンからパリ。深憂。2, だがいかにして。12, だがいかにして。我が心に聞けば, 何処と知らず行きて静かに暮すと答うべし。到着。来信, シャルロット。条件, 判明す。非常識, 欺妄, 話にならぬ条件。一年の禁止期間後, 夫, 最初に戻って約束取消すことあるべし。やんぬるかな, 心気憂劣, 嫌悪厭世きわまりたり。1. 雲泥万里の隔!

二十二日 発信, シャルロット。乱暴過激な態度こそ最も賢明な態度なるかも。両間中庸の態度, 余に成功を得さしめたる殆どなし。2は必然的に過激となるべし。今晚シャルロットに会わん。発信, スタール夫人。動揺の二時間。異なるかな, この状態。怪しき計画。夜, シャルロットと。1. 愛なきところに官能の興奮狂乱なし! 余が頭, すっきりと鎮まる。今の条理なき苦しみの虜とはなるまじ。シャルロットの愛を幸福の糧とすべし。しかし, シャルロットの不在に堪える心得なくはあらず。12, 折合い叶わぬ時は例の条件のむべし。明日もまた今夜に同じく努めて理性的たれ。続いて夜会, ゲ夫人宅。我が才知閃き愉快に心行かせたり。

二十三日 スタール夫人より素気なき短箋。アリガタキコトカナ [原文ドイツ語]。昨日に比し気分はるかにすぐれたり。願わくはこの気分の続かんことを。酔は去るとも幸福の素は残るべし。発信, スタール夫人。「小説」をオシェに読み聞かす。オシェ, 満足至極の体なり。余が持てる才を生かさぬはあたら惜しむべし! 夜, シャ

ルロットと。1. 嗚呼！熱冷めて、倦怠まさに兆さんとするか。これに怯えて魂消る<sup>たまげ</sup>の思ひす。

二十四日 嗚呼、まさに！倦怠兆したり。兎の毛ほどの障碍ありてまた熱にうかされる、このこと用心すべし。来信、スタール夫人。発信、スタール夫人、アルベール [スタール夫人の第二子か、1813年決闘死]。来信、シャルロット。今晩会う。夜、シャルロットと。色香に富み、変化に乏しく、大いなる心憂あり。シャルロット、例の条件のむべし。余の今の心境ならば、待つ身となるに堪え得るとの感あり。

二十五日 発信、シャルロット。深憂、終日むだにす。午餐、ゲ夫人宅。『マンリウス・カピトリヌス』[仏の詩人・劇作家ド・ラフォッス作1698年]。タルマ、見事。シャルロットより返書。かくなる愛、未だ嘗てなし。余はシャルロットに働せぬ男なり。相手は能力、他の女に比べて遜色なく、しかも愛と優しさの天女なり。来信、スタール夫人、父、ナッソー夫人。父の余を利用せんとする、かなり得手勝手なり。これむしろありがたしと思うべし。されば親不孝に対する自責の念、免除されて然るべし。発信、スタール夫人。

二十六日 12. 12. つらつら思うに、これ最良なるべし。発信、シャルロット。会いたし。来信、シャルロット。愛、限りなくシャルロットの心中に浸淫したり。さらに来信、シャルロット。その召使に対する不安。余、シャルロットの立場を危うくす。拔かりなく措置講ずべし。発信、スタール夫人。例の件、怪し。午餐、オシェ。シャルロットを迎え待たんとして帰宅。シャルロット来たらず。「召使油断大敵」と余をしてシャルロットに言わしめし警戒心、呪われてあれ！お陰ですべてぶち壊しとはなりぬべし。絶望に陥り、懊惱頭熱生ず。時を遣り過さんとして父、ナッソー夫人に便り認む。来る人來たらず。恐しき苦痛なるかな！待人ついに來たりぬ。夢中狂乱<sup>かたみ</sup>、互<sup>め</sup>にしたる半時。1. 夢中狂乱やや鎮静す。いぜんとしてこの女、愛で惑うべき女なり。

二十七日 発信、スタール夫人。ラクルテル訪問。スタール夫人の件、余の期待いま少しく多し。シャルロットより来信一つとしてなく悲嘆す。怨み辛みを言い立て難ずる手紙をシャルロット宛ものしつつある時、当の相手より便り一本届き、心気おさまりたり。余はシャルロットに対し、いやむしろすべてについて、実に奇妙な感情を懐くものなり。来信、スタール夫人。午餐、プーラ夫人宅。《コノ女ヲ包ミ照ラス虚光ニ衆目コトゴトク眩感サレテアリ》[ジャン＝バチスト・ルソーの歌謡詩のもじり]。他所行きてシャルロットと静息休心して暮す、余が願なり。クワニイ夫人訪問。スタール夫人にとって悪報。この忌わしくも呪うべき件の煩勞、止むことなしということか。明日まで待つべし。

二十八日 悩みの種の悪報解明にいざ一走りせん。この件のごたごたに疲体勞心重なりたり。発信、スタール夫人。フーシェに会う。さらなる吉報 [パリ近郊12里アコスタ

城館に滞在許される]。政治的には穏当な滞在が期待できよう。だが、それ以外の面では荒模様の公算大なるべし。人に苦勞をかけておいて、その償が喧嘩とくる、屈じはてたり。午餐、レニョ夫人宅。夜、シャルロットと。1. シャルロットの余を愛する、いとこまやかなり。今の生活続けんか、眼やられるべし。来信、スタール夫人。

二十九日(土曜日) 来信、シャルロット。夫がその条件を撤回するのではとの不安、頭を去らず。発信、シャルロット。さて、こちらはムラン [アコスタ城館所在地] へ発つ。吉報と言うべきもの持参せん。吉報のお陰で余の身今よりも自由となるか、平穩となるか。火曜日ここに戻りたし。アコスタへ発つ。なかなか穏やかなる夜。スタール夫人、心優しく才閃きたるも、シャルロットこそ愛しけれ。

三十日 火曜日の旅支度をす。発信、シャルロット。1 2を思案。別れたい、それだけが目的の時、なぜ1 2 [再婚] を持出す。なぜあえて世間を騒がせる。これ新しき見方なり。これをシャルロットに納得させること簡単にはゆくまい。が、やってみる要あり。喧嘩、午前四時まで。スタール夫人が普段の気持の時、こちらがふいと飛び出し行ってしまえば、大きな騒ぎもなく関係解消されるものと余は本気でそう考える。

#### 1806年12月

一日 来信、シャルロット。昨日の考え方あらためて検討す。シャルロットがこれに賛成する、そうもっていききたいものだが。なんといてもシャルロットとデュテルトル氏の交渉の成功しだいなり。例の「小説」にかかるも、思屈じたり。

二日 無益かつ無惨なる喧嘩。この種の喧嘩、いずれも空し。望ましきは即刻2をとる、或は大人しくその時を待つ。今のごとき中庸の態度は相手に鬼と見られるのが関の山なり。パリ行。シャルロットより怨の短箋。我が身の整理を計らんとすれば万人の恨を買うなり。夜、シャルロットと。和解。1. 余が今の願、田舎に帰り存分に腰を据え逗留することにあり。

三日 スタール夫人宛手紙を持たせ特使を一人アコスタに送る。午餐、シャルロット。1. 身まさに破滅せんとす。行って田舎にて暫く時を遣るべき理由のまた一つ生ず。「宗教」の執筆再開し、何事のあるうとも、仕事中断せず完成に漕ぎつけたし。

四日 発信、シャルロット。アコスタ復。コンドルセ夫人訪問 [パリにて?] フォリエル。カバニ。穏やかなる夜。

五日 来信、フールコー。発信、フールコー、デュテルトル夫人。十月中断あつて「宗

教」執筆再開。これを中断、他の仕事に手を出すこと今後は絶対にすまい。穏やかなる一日。余は浮世の女のありとある、色恋沙汰のありとあるよりも学問と孤独を愛してやまぬ者なり。

六日 来信、スタール夫人、転送便。デュテルトル夫人、なし。その怨、<sup>あいそづかし</sup>愛想尽に変じたるにや。余に理性のあらば愛想尽悲しむには及ばざるべし。嗚呼！2可能ならば、12たいした苦痛なく放棄できるはずなり。4、少しく。この「宗教」の著作は天が余に為すべく命じ給いし仕事なり。続くるに倦疲を覚えず、再開するに常に喜を覚ゆる仕事、これを措いて他になし。レカミエ夫人。カトラン氏。発信、シャルロット。

七日 シャルロットより来書またなし。悲しく侘し。疑心生じたるべし。相手を責むることできようか。喧嘩、中断す、幸いなり。だが、一部延期ということにほかならず。ここに残るは狂気の沙汰と言うべし！脱出いかせん。4. 喧嘩中断、以後堪えるに足る一日。出来るならば、今晚喧嘩はすまじ。

八日 発信、シャルロット。昨日回避の喧嘩、反復倍増して襲い来たり終日やまざりき。冷静たれと自らに言聞かせるも効なし。相手に嫉けられ苛立ちつものりにつりて余が理性の力もなすところなし。

九日(火曜日) 来信、シャルロット。余は愚狂なるべし！愚狂の二重奏というべし！かつは、杞憂という愚、かつは、杞憂あらば燃上がり、杞憂治まれば鎮火急冷する感情の起伏という愚なり。発信、シャルロット。4、少しく。シャルロットの<sup>かりのたまずさ</sup>雁玉章、天女のそれなり。シャルロット相手なら幸福になれるはずなり。

十日 発信、シャルロット、フルコー。余が愛のいかばかりか、シャルロットに述懐の必要性に駆られたり。来信、シャルロット。書類署名せられたり。4、纒。<sup>リウマチ</sup>忌わしき痺麻質斯。パリ行不能を危ぶむ。

十一日 パリへ発つ。残される孤独にスタール夫人心を痛めたり。<sup>あやにく さが</sup>生憎の性なるかな！到着。来信、シャルロット。今晚会う。夜、シャルロットと。1. 余が時になす最眞目の評価を遙かに上回る才と情の持主なり。

十二日 発信、スタール夫人。4、「小説」少しく、これ一週間で仕上げるべきものなり。夜、プーラ夫人宅。奇妙な国なるかな。見るところ、人情、真実、本心、すべて根こそぎこの国から放逐されたり。シャルロットと一刻。署名されたる書類、余に披露す。シャルロットが世の女の例にもれず、<sup>ためし</sup>気難しく、他人の一言に傷つきやすき女であろうとも何かはせん、喜んで12. 女はなべてこうしたものだが、シャルロットが余を愛する心、情け深く嘘偽りなく、他所に求めて求まるものでなし。

十三日 発信, スタール夫人。夫人にとって悪報。夫人自ら混乱の種を蒔くなり。最悪  
 いたらば余が行方<sup>ゆくえ</sup>, おのずから明らかなり。来信, シャルロット。発信, シャル  
 ロット。余があるべき将来はここにこそあれ。来信, スタール夫人。午餐, レニヨ  
 宅。世人, いかにも野篋坊<sup>のっぺらぼう</sup>とはなりにけるかな! 世に在りて過ぐす我が身の上に  
 けりをつけたきこと, 如何ばかりなるや! 夜, ゲ夫人宅。生きて在る, 味気なし。

十四日 仕事, 「小説」, 悪くなし。発信, スタール夫人。シャルロットに便り認む。シャ  
 ルロット, デュテルトル氏の同意ありて今晚余と逢瀬の約。氏が一年の期間 [相  
 見禁止] を短縮することまちがいなかるべし。来信, スタール夫人。サンレジェ  
 行の沙汰, 用心のこと [禁を犯しランブイエ近辺に行ったことか]。夜, シャルロット  
 と。1. 三時間, いと懐かしくしんみりと。

十五日 発信, スタール夫人。来信, スタール夫人。4, 「小説」, 良。来信, シャルロッ  
 ト。優しき天女。発信, シャルロット。午餐, オシェ。芝居見物。『聖母訪問会尼僧』  
 [ピカル作, 二幕物喜劇]。不作狂言, 1806年『操人形劇場』をものしたる作者に  
 しても, 1793年に書くとあらばこの程度が妥当というところか。

十六日 発信, スタール夫人。余は明日しか出発できず。「小説」の構想を改む。シャ  
 ルロットと遊行, 終日相携う。世になく素晴らしき玉の姫なり。余のものとなる  
 べきや。愚かなるかな, デュテルトルの御仁! 此方誉たかき国民にこの手の御仁,  
 千万を数うるなり [シャルロットは独人, 夫のデュテルトルは仏人]。1. 氏に貴重な  
 忠告を授けたりとの思いあり。「小説」の構想さらに改む。

十七日 発信, シャルロット。旅程, バリからムラン。到着。穏やかなる夜。晚餐後,  
 やや冷やかなる会話。喧嘩は避ける, しかも事実<sup>こと</sup>に反する語は一語たりとも口に  
 せずして, と心に決めたり。決意は易く行うは難し。

十八日(木曜日) 発信, シャルロット。4, 「小説」。ちくりと棘ある会話。12, 一  
 瞬揺らぎたるも, もとにおさまる。幸福こそ余の望なれ。

十九日 4, 「小説」。

二十日 4, 「小説」。為すべき仕事は「宗教」執筆再開ではあるまいか。発信, シャル  
 ロット。

二十一日 来信, シャルロット。余の忠告に従うは不可能, 不安堪えがたしとある。シャ  
 ルロット, 最大不安はいとも軽く受けながし, 最小に恐れ慄<sup>はな</sup>いているのである。  
 4, 「小説」。さらにエレノールの物語と死に至る<sup>くだり</sup> 件の二章を書き終えた時点で  
 打切る。発信, シャルロット, 父。

二十二日 4, 「小説」。デュポン・ド・ヌムール [仏の経済学者・重農主義者, 1814年に定住, その息子が後の世界最大の化学企業デュポン社を築いた, 1739-1817]。別の意味で2. 喧嘩なければど気詰り支配す。人間の感情は暴力よりも気詰りによって止むものなり。

二十三日 4, 「小説」。優しき会話。将来計画。《飛ビ交ウハ虚ロナル形骸ナリ》[ウェルギリウス 引用ラテン語]

二十四日 4, 「小説」。これで丸三日, シャルロット何も書いて寄越さず, こちらも書き遣らず。

二十五日 来信, シャルロット。フールコー奴, 託けし手紙忘れたということか。だが, 不安心配にがみの苦, シャルロットには良薬となるべし。発信, シャルロット, ポワヴァン。喧嘩。情況が情況なれば, 避けるべき手段なし。嗚呼, シャルロット, 自由の身とならましかば! それどころか紛糾複雑, 恐るべし。4, 「小説」。

二十六日 今朝, 来書一本期待す, されば余が便り落掌はつきりすべし。来書なければ些か心配なり。4, 「小説」。ブフレール氏 [仏の大衆詩人, 普亡命後ナポレオンにつく]。

二十七日(土曜日) さらに来書なし。こちら, 関係ひび割れ涸渴す。この事態, いつになったら止むべきか。4, 「小説」。シャルロットに一言書き遣る。

二十八日 来書さらになし。もはやほつてはおけず。明日, パリへ人を遣るべし。余の手紙デュテルトル氏が妨害を疑う。「小説」をブフレール氏に朗読す。聴く者, 余が「小説」の意味よく捉えたり。たしかに, 余が描きしは絵空事にはあらず。《自ラ不幸ヲ知ラザルニ非ザレバ》[ウィルギリウス。後半部, 《不幸ナル人ヲ助クルコトヲ知ルナリ》引用ラテン語]。もう一人別の女の話を絡ませるやこの作品を作品たらしめること不可能なること, この朗読で判然とす。[主人公, 心なく浅ましかるべし] [この部分日記原稿では斜線で削除]。エレノールの意味なくなるべし。さらに, 主人公に別の女に対する義務が生じそれを果さぬとあらば, その薄志弱行, 心なく浅ましく映るべし。「小説」が原因の予期せぬ喧嘩。この種の喧嘩, 今や肉体的苦痛とはなりぬ。吐いて血を見たり。また, シャルロット, うんともすんともなく, また, 余が先行き, なべて闇の中なり。

二十九日 夜, 喧嘩再開, 四時まで続く。余が嘘がつけぬこと, また, 罵詈雑言で絞りあげられようとも媚諂こびへつらいを色に出さねば, さらに卑劣不当の扱いを受くるなり。天地神明に誓って2. 来信, ポワヴァン。シャルロット, これまでの余の手紙受取りながら返なし。手紙はシャルロットの許に届けさせたり。デュテルトル氏, そを妨害せしや。便り絶えてなしとあらば, 明日パリへ人を遣るべし。更に喧嘩, 二時間。我が腹は決りたり。黙って出て行く。後のことは知らぬこと。すでに身辺整理を始む。4, 「小説」。決意, 揺るがず, そしてこの種の決意は最も迅速な

るを最も良しとす。それにしても、せめてシャルロットより便りの一本なきものか！

三十日 来信, シャルロットより数通, 父より一通。余が徒に不安動揺せしはずべてシャルロットのおかげである。シャルロットはその不安動揺から落着を取戻していたのであり, その落着こそ余もまた得て然るべきものではなかったか。木曜日, 逢えるという。行って逢うこと可能なりや。余の計画: 会いに来いと父の口から言ってもらい, ひとたび外に出たからには二度と再びこの鉄の檻には戻らぬこと。木曜日 [1月1日], パリには行くまい。パリに行かずとも, 一週間後ここは決裂破綻きたすべし。ここの女は狂気そのものなり。発信, シャルロット。発信, フールコー。会話, 午前四時まで。かくあらば眼やられ, 健康損い才能涸渴せん。悪婦。哀れシャルロット, 余が手紙悲痛に陥れるべし。

三十一日 発信, 父, 為替手形300リーヴル同封。発信, シャルロット。シャルロット, 取るべき態度決定せん。同意とあらば, 余はパリを発ちここには戻るまい。4, 「小説」, 病気導入, 余りに唐突なり。終日静穏。鬼の居なければ。鬼, 帰来して喧嘩。思乱逆上の二時間後, 余は自らの言葉に深く感ずるところあり, そのお陰で二人は和解したり。だが, 2と12。